

促成ナスの整枝に関する研究

町田治幸・阿部泰典・福岡省二・新居 清

Yields and training of egg-plants in forcing culture

Haruyuki Machida, Yasusuke Abe, Shoji Fukuoka and Kiyoshi Nii

I. はじめに

最近のハウス促成ナス栽培においては、生産費の高騰がいちじるしく、この対応として加温燃料の節減方法や施設の利用度の向上による収益の増大を検討しようとする動きもある。しかし施設の管理をさらに適確にし、収量の増加、品質向上によって生産費を低減し、生産性を向上させることが作物の生理上、より合理的と考えられる。

筆者らは後者の立場にたつて、促成ナスの収量増加と品質向上について検討を行なっているが、整枝法と栽植密度、摘葉の程度と品質、収量について検討した結果を報告する。

II. 試験方法

1. 主枝の仕立方と栽植密度

試験1 (1970) および試験2 (1974) では供試品種に千両 (タキイ) を用い、8月10日は種、10月30日定植の作型についてアカナス台木の接ぎ木栽培で、主枝の仕立方と栽植密度を検討した。試験区分は次表の通りにし、最低気温は10℃を確保した。

試験 1 (1区7.2㎡の2区制)

主枝の仕立方法	10aの定植本数	10a主枝数	畦幅	株間	条数	側枝の整枝法
1) 2本仕立	2,000本	4,000本	180cm	55cm	2条植	側枝は1段着花位置より上に1葉残して摘心。 また、葉は混み合わないよう黄化葉から摘葉した。
2) 3 "	2,000	6,000	"	55	2	
3) 3 "	1,500	4,500	"	74	2	
4) 4 "	1,000	4,000	"	55	1	

試験 2 (1区10株の1区制)

主枝の仕立方法	10aの定植本数	10a主枝数	畦幅	株間	条数	側枝の整枝法
1) 2本仕立	1,400本	2,800本	160cm	45cm	1条植	前期の混まない時期は5,000本主枝区を除き1側枝2段収穫、中期以降は1段収穫後切り戻す。
2) "	1,800	3,600	"	35	1	
3) "	2,500	5,000	"	25	1	
4) 3本仕立	933	2,800	"	67	1	
5) "	1,200	3,600	"	52	1	
6) 4本仕立	700	2,800	"	89	1	
7) "	900	3,600	"	69	1	

2. 側枝の整枝と栽植密度

試験3 (1974) は試験2と同ハウス, 同作型で側枝の整枝法を次表の試験区分で検討した。

試験3 (1区10株の1区制)

主枝の仕立方	10aの主枝数	側枝の整枝法	
1) 2本仕立	5,000本	a	aは1側枝1段収穫
2) 〃	5,000	b	後に1葉残して切戻す。
3) 〃	3,600	a	す。
4) 〃	3,600	b	bは1側枝2段収穫
5) 〃	3,600	c	後に1葉残して切戻す。
6) 〃	2,800	a	す。
7) 〃	2,800	b	cは1側枝3段収穫後
8) 〃	2,800	c	に1葉残して切戻す。

試験4

(摘葉期間11月15日~3月15日, 1区10株1区制)

摘葉区分	備考
1) 開花時摘葉	開花時に花より下の葉を摘葉, 側枝も同様にし, 収穫時に切戻した。
2) 開花後10日摘葉	開花後10日に花より下の葉を摘葉, 側枝も同様にし, 収穫時に切戻した。
3) 収穫時摘葉	収穫時に収穫果より下の葉を摘葉, 側枝の切戻しは収穫時に行なった。
4) 無摘葉	黄化葉, 老化葉のみ摘葉, 側枝の切戻しは収穫時に行なった。

試験5 (摘葉期間1番花開花時~4月30日, 1区10株1区制)

試験区分	備考
1) 収穫時摘葉 2葉切戻し	主枝は収穫時に果実より下の葉を摘葉し, 側枝は1段果収穫時に2葉残して切戻した。
2) 収穫7日後摘葉 3葉→1葉切戻し	主枝は収穫7日後に収穫果より下の葉を摘葉。側枝は1段果収穫時に3葉残して切戻し, さらに7日後1葉残して切戻した。
3) 収穫7日後摘葉 2葉切戻し	主枝は2)と同じ。側枝は1)と同じ。
4) 収穫7日後摘葉 2葉→1葉切戻し	主枝は2)と同じ。側枝は1段果収穫時に2葉残して切戻し, さらに7日後1葉残して切戻した。
5) 収穫7日後摘葉 1葉切戻し	主枝は2)と同じ。側枝は1段果収穫時に1葉残して切戻した。
6) 収穫14日後摘葉 2葉切戻し	主枝は収穫14日後に収穫果より下の葉を摘葉。側枝は1)と同じ。

(注) 1節2果以上成りは2果目の収穫を基準にした。

試験6 (1976) は, は種8月3日, 定植10月18日, アカナス台木使用以外は試験5と同じ耕種概

3. 摘葉が生育収量におよぼす影響

試験4 (1974) は試験2と同ハウス, 同作型(10aの主枝数3,600本の栽植密度)で, 整枝は主枝を2本仕立, 側枝を1段着花位置より上に1葉残して摘心し, 収穫時に切戻す方法をとった。この場合の摘葉の強弱(次表の通り)が生育収量におよぼす影響を検討した。

試験5 (1975) は収穫7日後摘葉を中心に, 側枝の切戻し方法を組合せて, 次表の試験区分で検討した。

供試品種に千両の自根苗を用い, 8月10日は種, 10月27日定植とした。栽植密度は畦幅170cm, 株間33cm, 1条植えの2本仕立てで10a主枝数3,600本とした。また, ハウス内の気温は10~30℃の範囲で管理した。

要で, ねらいもほぼ同じである。

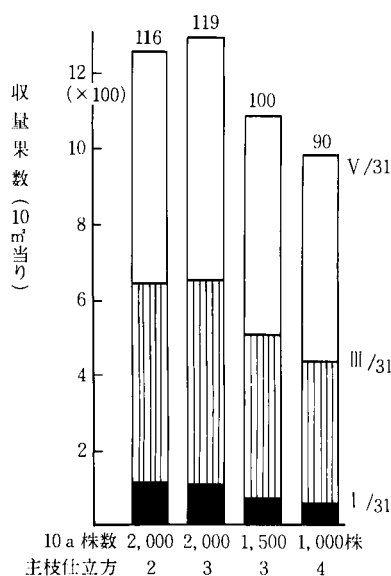
試験区分は次表の通りである。

試験区分	主枝の摘葉	側枝の切戻し
1) 収穫時摘葉1葉切戻し	収穫時に果実より下の葉を摘葉	1段果収穫時に1葉残して切戻す
2) 収穫時摘葉2葉切戻し	〃	〃 2 〃
3) 収穫7日後摘葉1葉切戻し	収穫7日後にその果実より下の葉を摘葉	〃 1 〃
4) 収穫7日後摘葉2葉切戻し	〃 〃 〃	〃 2 〃
5) 収穫14日後摘葉1葉切戻し	収穫14日後に	〃 1 〃
6) 収穫14日後摘葉2葉切戻し	〃 〃 〃	〃 2 〃
7) 無摘葉 2葉切戻し	黄化葉, 老化葉のみ摘葉	〃 2 〃

(注) 1節2果以上成りは2果目の収穫を基準にした。

Ⅲ. 試験結果および考察

試験1の結果は第1図の通りで、10a 当り1,500株定植で3本仕立の収穫果数を指数100とすると、2,000株定植の3本仕立が119で最も優れ、ついで2,000株2本仕立の116となり、1,000本の4本仕立は90で劣った。



第1図 栽植密度及び主枝の仕立方と収量

このことから、10a 当りの主枝数4,000~6,000本の栽植密度では、密植によっても増収は期待できるが、2,000株の2本仕立、すなわち主枝数4,000本が同じ密植程度の3本仕立、4本仕立より優れていること、また1.5倍密植の2,000株定植3本仕立(主枝数6,000本)との比較でも大差なかったことから、主枝の仕立方が収穫果数におよぼす影響の大きいことがうかがえる。

第1表 整枝法、植栽密度と生育 (10株平均)

整枝法	主枝数/10a	主幹長	第1主枝		第2主枝		第3主枝		第4主枝	
			主枝長	葉数	主枝長	葉数	主枝長	葉数	主枝長	葉数
2本仕立	5,000本	30.0cm	77.2cm	16.6cm	76.8cm	17.2cm	—cm	—cm	—cm	—cm
	3,600	24.9	89.6	18.0	75.4	16.4	—	—	—	—
	2,800	30.5	83.8	18.4	74.6	16.2	—	—	—	—
3本仕立	3,600	30.5	88.0	19.4	81.0	18.4	52.8	13.4	—	—
	2,800	27.9	86.8	19.2	80.4	17.8	57.8	14.2	—	—
4本仕立	3,600	31.9	90.8	19.4	74.2	17.2	64.2	15.0	52.8	13.6
	2,800	28.6	88.6	20.0	77.0	18.6	59.2	14.4	43.0	12.6

なお、収穫は80~100gを目安に行なったので、重量比較でも同様の傾向であった。

試験2

(1) 生育は第1表の通りで、各区ともおおむね順調であった。

2本仕立は第1、第2主枝長に大差がなく、生育むらがほとんどなかった。しかしながら3本仕立、4本仕立になると、第2主枝までは2本仕立区と変わらない順調な生育であったが、第3主枝以降の伸びが悪い。したがって生育むらが認められる。その程度は3本仕立より4本仕立が大きかった。

多主枝の整枝でも地力、苗質、定植期、肥培水管理、温度条件等の環境条件と栽培技術が整えば、主枝間の生育むらをなくすることは可能であろう。しかし一般的にはかなりむつかしい。

その点、2本仕立では多少の不便があっても生育は良く、揃いも良い。むしろ草勢の強すぎる点に留意する必要がある。

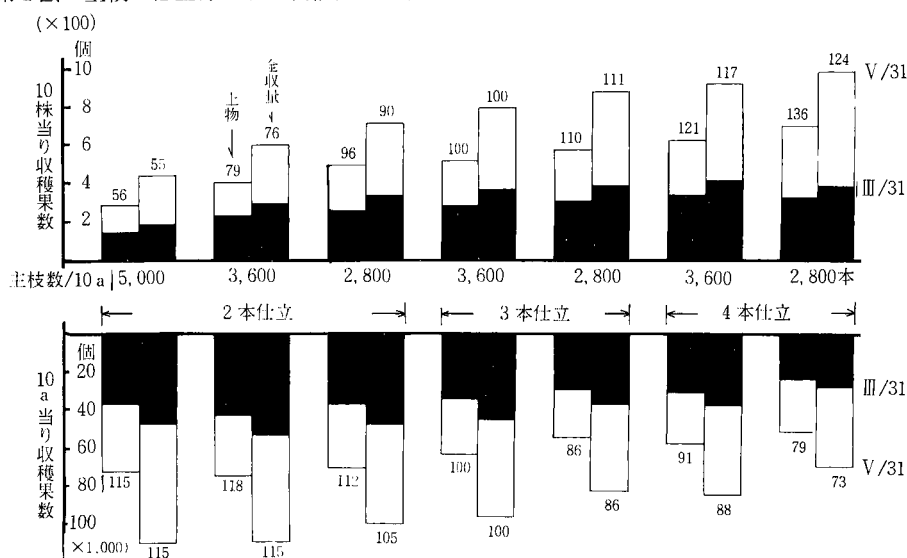
(2) 収量については第2図の通りであった。

① 1株当りの収穫果数;仕立方でみると4本仕立>3本仕立>2本仕立となり、多主枝ほど収量は多い。また、栽植密度でみると粗植が優れている。

その結果、4本仕立の10a主枝数2,800本が最も優れ、標準的な3本仕立の主枝数3,600本区の指数100に対して124となった。ついで、4本仕立3,600本の117、3本仕立2,800本の111の順で、2本仕立区は主枝数2,800→3,600→5,000本の順に88→76→55であった。

また、最も多収穫の4本仕立の2,800本区の1株当り収穫果数は99.8個で、最も少なかった2本仕立の5,000本区の44.3個に対して約2.3倍であ

第2図 主枝の仕立方および栽植密度と収量



った。

② 1主枝当り収穫果数は、整枝法でみると、2本仕立>3本仕立>4本仕立となった。

また、栽植密度別では粗植ほど優れた。とくに主枝数5,000本の密植になると著しく劣った。

③ 上物率については整枝法による差は明らかでなかったが、栽植密度では粗植の2,800本区がやや優れた。

④ 10a当りに換算した、つまり単位面積当り収量は、仕立方では2本仕立区が最も優れ、ついで3本仕立、4本仕立の順となった。

つぎに栽植密度でみると、同じ仕立方では密植が多収となったが、2本仕立の主枝数5,000本と3,600本では大差はなかった。また、2本仕立の10a主枝数2,800本区は3本仕立、4本仕立の3,600本区より優れた。

以上の結果から、主枝の仕立方と栽植密度は2本仕立の10a主枝数3,600本程度が適当と考えられる。しかし、ナス専作の大規模経営では、2本仕立の2,800本は3本仕立の3,600本より実用性は高いものと思われる。

試験3

(1) 生育は第2表の通りで、栽植密度、側枝の整枝法別に一定の傾向は認められなかった。

(2) 収穫果数は第3図の通りであった。

10aの主枝数が3,600~2,800本の標準からやや

第2表 生育比較(5株平均・2月27日調査)

主枝数/10a	側枝の整枝区分	主幹長	第1主枝		第2主枝	
			主幹長	葉数	主幹長	葉数
5,000 本区	a	24.9	94.6	19.8	73.8	17.0
	b	30.0	77.2	16.6	76.8	17.2
3,600 本区	a	26.3	89.6	18.8	89.4	19.2
	b	24.9	89.6	18.0	75.4	16.4
	c	30.2	86.2	18.6	82.8	18.2
2,800 本区	a	25.8	78.6	18.0	83.6	18.6
	b	30.5	74.6	16.2	83.8	18.4
	c	27.8	82.6	18.4	81.0	19.0

(第2主枝 1番果直下の側枝を利用)

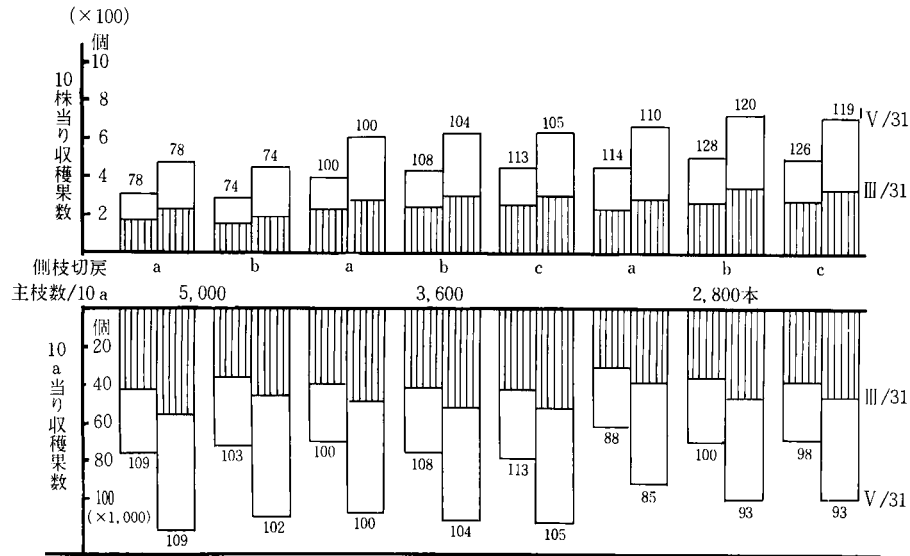
粗植の栽植密度では、側枝を伸ばしてb(2段まで収穫して切戻す)、c(3段どり)とする方法がa(1段どり)より明らかに増収になったが、b、cの差は少ない。また、主枝数5,000本の密植になると、2段どりが1段どりより劣った。

以上の結果から、10a当りに換算した収穫果数では密植(10a主枝数5,000)が優れたが、主枝数3,600本の場合には側枝で2段どりすると、密植区とほとんど変わらない収穫が期待できる。また2,800本区での側枝の2~3段どり効果は3,600本区の効果より高く、実用性はかなり高い。

試験4

(1) 生育は第3表の通りで、無摘葉(黄化葉、老化葉のみ摘葉)が最も優れ、ついで収穫時摘葉

第3図 側枝の整枝法および栽植密度と収量



(注 a : 側枝1段収穫, b : 側枝2段収穫, c : 側枝3段収穫)

(収穫時にその果実より下の葉を摘葉)であり、開花10日目および開花時の強摘葉は明らかに劣った。

(3) 収量については第4図の通りで、無摘葉が最も優れ、ついで収穫時摘葉であり、開花後10日目摘葉、開花時摘葉は明らかに劣った。このことから、主枝、側枝にわたっての強摘葉

第3表 摘葉の強弱と生育相 (5株平均)

	主幹長	第1主枝		第2主枝		平均	
		主枝長	節数	主枝長	節数	主枝長	節数
1. 開花時摘葉区	24.3	96.4	19.8	83.7	17.7	90.1	18.8
2. 開花後10日目摘葉区	28.1	95.3	20.0	79.8	17.5	87.6	18.6
3. 収穫時摘葉区	29.1	100.1	21.2	88.5	18.0	94.3	19.6
4. 無摘葉	26.3	105.7	20.2	91.1	19.0	98.4	19.6

(同化能力に余力を持った葉の摘葉)は果実の伸長および肥大を抑制するばかりでなく、収穫果数の減少ひいては花数の減少につながるものと思わ

(2) 果形については第4表の通りで、果実の長さに差が認められる。すなわち、開花10日目と開花時摘葉の強摘葉は収穫時摘葉に較べ2cm程度短かく、明らかな差が認められた。

れる。

以上から、摘葉のおおかたの目安は、収穫時にその果実より下の葉の老化程度によって行うべきと考えられる。

しかしながら、収穫時と無摘葉の比較では大差なく、収穫時にその果実より下に2~3葉あれば果実の伸びは影響を受けないものと思われる。

試験5

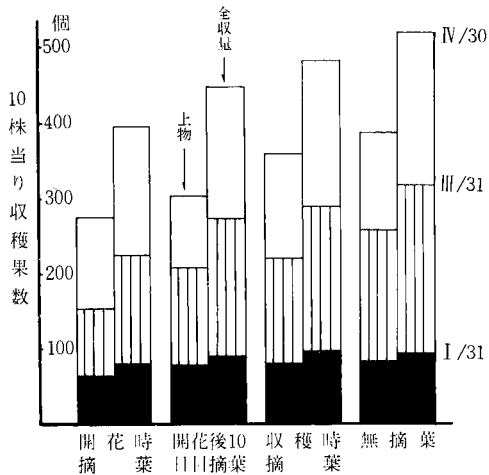
前年行なった試験4をもとに、収穫時摘葉を対照にそれ以降の摘葉時期と側枝の切戻しについて

第4表 摘葉の強弱と果形 (10果平均)

	3月13日調査					3月17日調査				
	果重	果長	果径			果重	果長	果径		
			上部	中部	下部			上部	中部	下部
1. 開花時摘葉区	105	16.7	3.4	4.5	4.3	116	16.4	4.1	4.7	4.7
2. 開花後10日目摘葉区	103	16.5	3.6	4.3	4.4	107	15.6	3.8	4.6	4.4
3. 収穫時摘葉区	113	18.7	3.6	4.4	4.3	118	18.4	3.6	4.4	4.4
4. 無摘葉	115	18.9	3.5	4.3	4.4	120	19.9	3.7	4.5	4.4

検討した。その結果は次の通りである。

(1) 生育については第5表の通りで、主枝の摘葉と生育の関係(試験区分1, 3, 6で比較)では、収穫時摘葉がやや劣ったが、収穫後7日目と



第4図 摘葉の強弱と収量

第5表 (5株平均, 12月23日調査)

	第1主枝			第2主枝			平均		
	主枝長	節数	葉長	主枝長	節数	葉長	主枝長	節数	葉長
1. 収穫時摘葉 2葉切返し	58.6	13.4	24.5	47.4	11.0	24.4	53.0	12.2	24.5
2. 収穫7日後摘葉 3葉→1葉切返し	59.2	13.4	24.0	51.8	11.8	24.5	55.5	12.6	24.3
3. 収穫7日後摘葉 2葉切返し	66.0	14.0	24.5	48.2	11.0	23.6	57.1	12.5	24.1
4. 収穫7日後摘葉 2葉→1葉切返し	56.4	12.2	25.9	57.4	12.4	24.4	56.9	12.3	25.2
5. 収穫7日後摘葉 1葉切返し	52.6	12.2	24.7	55.0	12.2	24.2	53.8	12.2	24.5
6. 収穫14日後摘葉 2葉切返し	66.4	13.6	24.0	48.0	11.2	25.1	57.2	12.4	24.6

14日目までは大差なかった。

また、側枝切戻し方法による生育への影響(試験区2, 3, 4, 5で比較)は、収穫7日後摘葉1葉切戻しのNo.5がやや劣るほかは大差なかった。

(2) 収量については第5図のとおりで、主枝の摘葉区分では収穫14日後摘葉が優れたが、収穫時と収穫7日後では大差なかった。

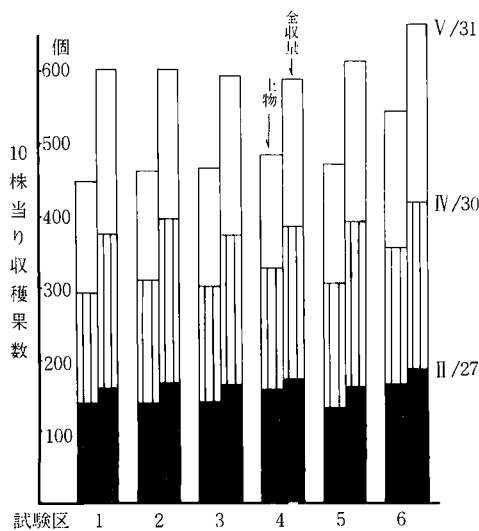
また、側枝切戻し区分では1葉切戻しがやや優れた。

(3) 上物率を合計収量に対する比率で見ると、主枝の摘葉区分では収穫14日後摘葉が84%で最もすぐれ、ついで収穫7日後摘葉の79%、収穫時摘葉の75%の順となり、一定の傾向が認められた。

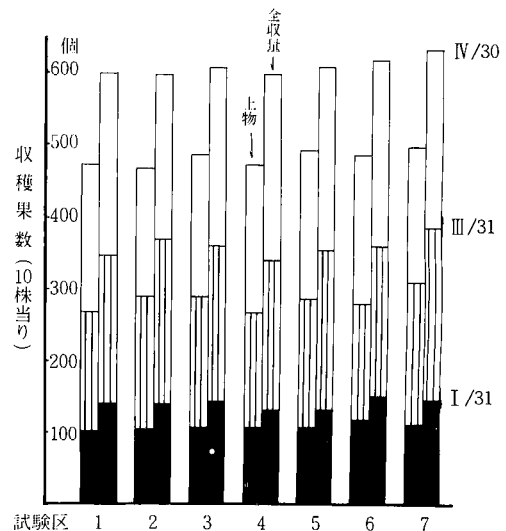
しかし、側枝切戻し方法による差はほとんどなかった。

以上から、促成ナスの主枝の摘葉は10a当り主枝数3,600本程度の栽植密度では、試験4と同様収穫時にその果実より下の葉の老化程度によって行なうべきで、同化作用の十分できる葉は混みすぎないかぎり大切にすべきものと考えられる。

また、側枝の切戻しは収穫時に1葉残して行なう方法(慣行的な方法でもある)でよい



第5図 主枝の摘葉および側枝切戻しと収量



第6図 主枝の摘葉および側枝の切戻しと収量

ものと思われるが、なお検討の余地がある。

試験 6

前年度の試験 5 とほぼ同様の試験区分について収量比較したもので、その結果は第 6 図の通りで、ほとんど同様の成績であった。

したがって、結論の明らかでなかった側枝の切戻しについては、本試験（4 月末で収穫調査打切り）では、1 葉および 2 葉残して切戻したものと収穫時に 3 葉又は 2 葉で切戻し、1～2 週間後に 1 葉残して再度切戻す方法の間には大差なかった。さらに 5～6 月の過繁期を考えると 1 葉残しての切戻しが適当と考えられる。

IV. 総合考察

従来、生産費の比較的安かった時期は、やや粗放的な栽培管理にして規模の拡大を計り、所得の増大をねらう経営を行ってきた。そのため、10 a の収量は 10 t 程度に定着していた。しかしながら、現在の生産費からみれば 13 t 程度の収量を目標にしなければ、経営的にむづかしい。

そこで筆者らは、収量構成の要因のうち整枝方法について検討を続けてきたが、その結果から促成ナスの整枝方法として次のように考えられる。

(1) 栽植密度について

促成ナスの栽植密度について、本県では 10 a の主枝数が 3,600 本程度の 3～4 本仕立が多く、2 本仕立は少ない。また他県では、2 本仕立の試験成績として、室園³⁾や伊藤¹⁾がある。前者は 10 a 主枝数が 7,200 本程度までは密植ほど増収するとしているのに対して、後者は 3,600 本程度が適当としており、結論は一致していないが、試験 1～2 の結果に示すように、主枝の仕立方によって栽植密度も変える必要があることが指摘できる。

すなわち、試験 1 から 3 本仕立では、10 a の主枝数 6,000 本は 4,500 本より 19% も増収しており、密植の効果が顕著であった。しかしながら、この試験でも 2 本仕立の主枝数 4,000 本は、3 本仕立の 6,000 本と大差のない収量であり、主枝の仕立方と栽植密度の関係の深いことがうかがわれた。

そこで、試験 2 では、主枝の仕立方と生育、収量との関係を、そして 2 本仕立で栽植密度（10 a 主枝数 2,800, 3,600, 5,000 本）と収量について検討

した。

その結果、主枝の仕立方で多主枝ほど生育むらが大きくなり、そのため 1 主枝当りの収量は多主枝ほど少ない。このことから、単位面積当りの収量は栽植密度が同じの場合、仕立方が 3 本から 4 本と多主枝仕立になるほど劣った。

また 2 本仕立では、1 株当りの収量は粗植が勝るが、単位面積当りでは 5,000 本の密植が最も優れた。しかしながら、3,600 本とは大差なく、5,000 本程度が 2 本仕立の密植限界に近いものと推察される。

以上から、3～4 本の多主枝仕立では、主枝数 6,000 本程度までは密植の効果があり増収するものと思われるが、2 本仕立では 5,000 本程度が密植による増収の限界であり、栽培管理の集約度、品質を考えると主枝数 3,600～4,000 本が適当な栽植密度と考えられる。

なお、3～4 本の多主枝仕立の場合でも、生育むらがない栽培ができれば、2 本仕立の栽植密度よりやや多めが適当と思われる。

(2) 側枝の整枝方法について

この試験は、2 本仕立の 10 a 当り主枝数 2,800, 3,600, 5,000 本について、側枝の切戻しを、それぞれ 1 段、2 段、3 段収穫時に 1 葉残して行なった。

その結果、生育はどの区とも順調で大差はなかった。また、収量は主枝数が 2,800 本と 3,600 本では 2～3 段まで収穫してから切戻す方法が、1 段だけ収穫して切戻す（1 段どり）のより優れた。しかし 5,000 本の密植区では 2 段収穫は 1 段だけの収穫より劣り、混み過ぎの弊害がうかがわれた。

以上から、主枝数が 3,600 本および 2,800 本の栽植密度では、収穫後半（高節位）までの側枝 2～3 段どりは問題があると思われるが、収穫前期～中期までは混み過ぎない程度に、2～3 段どりを行ない、収穫後期にはいと 1 段どりにすれば、密植の利点と粗植の利点が活かされるものと推察される。

(3) 摘葉について

ナスの品質を論じる場合、果皮の着色具合はかなりのウエートを持っている。そのためには、果実に直接太陽光線を当てることが最もよいとされ、したがって促成栽培では冬期の寡日照時に、いか

に色沢を濃くあげるかということで摘葉に苦心している。

ところで、冬期は新葉の増加は春や初夏に比較すれば緩やかである。にもかかわらず、果実の色沢にウエートをおきすぎためか、現地では強摘葉の例が多い。

そこで、強摘葉の弊害と摘葉の適時期を明らかにするために、試験4～6を行なった。

まず、試験4の結果、強摘葉は室園ら⁴⁾の報告と同様に生育・収量にマイナスに働き、果実の伸長の悪いことが明らかになった。また、収量の減少は収穫果数、つまり着花数の減少によるものであったが、これは斎藤の報告²⁾による成熟葉の強摘葉が原因の花芽形成遅延からくる着花数の減少によるものと考えられる。

摘葉の程度と果皮の色沢の関係については明らかにできなかったが、生育の中期以降、無摘葉(黄化葉等とくに老化した葉だけは除去した)では、着色不良果が見受けられた。しかし、収穫時にその果実より下の葉を除去した場合は、それより強摘葉のものと比較して肉眼では判別は難かしいように思われた。

試験4の成績をもとに、試験5と試験6では収穫時の摘葉から無摘葉の間を1週間間隔に2区設けると同時に、側枝切戻し時の葉の残し方について検討した。

その結果、主枝の摘葉時期と生育・収量の関係についてみると、生育では収穫時摘葉がやや劣るようであるが、収穫後1週間と2週間たってからその果実より下の葉を摘葉したのでは、生育差は認められない。また収量は大差はないが、摘葉の軽いほどやや増収した。なお、上物率は軽い摘葉ほど明らかに優れた。

次に側枝の切戻し方法として、収穫時に1葉残して切戻すのを基本に、2葉区、収穫時に2～3葉残して切戻し1週間後に1葉残して切戻す、2回切戻し方法等を組合せて検討した結果は、いずれの区とも生育・収量・上物率で大差なかった。

以上から、2本仕立で10aの主枝数が3,600本程度の栽植密度の摘葉は、収穫時にその果実より下の葉の老化程度によって行なうべきで、こみすぎないかぎり、軽い摘葉にとどめるべきと考える。また、側枝の切戻しは1葉残して行なうのが適当

と思われる。

(4) 以上をとりまとめると

7～8月は種の長期一作型のナス促成栽培の整枝方法は、①主枝の仕立方は2本仕立とし、②栽植密度は10a当り1,800～2,000株(主枝数3,600～4,000本)、③側枝の切戻しは生育前～中期までは1側枝で2～3段まで収穫し、後期は1段収穫に切り換えて収穫時に1葉残して切戻す。④主枝の摘葉は収穫時にその果実より下の葉の老化程度をみて、軽い摘葉にとどめる。

以上の組合せが品質、収量の両面からみた、最適の整枝法と考えられる。

なお、この組合せによる収量は10a当りに換算して5月末で11t強になっており、6月末まで収穫を続けると、13t以上になることは十分可能と思われた。

V. 摘 要

(1) 促成ナスの収量、品質向上をはかるため栽植密度と整枝方法、摘葉の程度について検討を行なった。

(2) 単位面積当りの主枝数を同一とした場合、栽植本数を多くして主枝数を少なくする仕立方が増収となる。しかし、仕立方と栽植本数とは相互関連性があり、主枝2本仕立では10a当り2,500株、立枝3本仕立では2,000株程度が限度と認められた。

(3) 主枝から発生する側枝は、葉・枝の混みあわない収穫中期くらいまでは2果収穫し、1葉残して切戻しを行なうが、収穫後期では1果収穫後1葉残して切戻しを行なう方がよい。

(4) 摘葉は多いほど果実の伸長が悪く、上物率が低下し、収穫果数も減少する。ただ極度の老化葉は病害の発生を助長するので、収穫果以下の老化葉を混みあわない程度に軽くすべきである。

引用文献

- 1) 伊藤克己・桜井雍三ら(1976・未発表)：野菜試験成績概要(東海・関西), 126
- 2) 斎藤隆(1972)：山形大学紀要(農学), 6(3), 539～550
- 3) 室園正敏・近藤雄次(1972・未発表)：野菜試験成績概要(西日本)
- 4) 室園正敏・近藤雄次(1975)：園芸学会発表要旨, 50年(春), 467